明治二十年十一月廿五日刊行

每月一回發行
壹冊正價廿錢
全國無郵送稅

通信女學講義錄

第七卷

女學雜誌社

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

〇通信女學發行の主旨

女學雜誌社　巖本善治

當今女子敎育の說、甚だ隆んとなりて、各地の女學校は、日に日に其數を加へ、此に就て學文する女子も、亦た月々に多くなれり、此摸樣にては、今四五年の內には、女學の進步非常にて、おさおさ男子にも劣らざる有爲の女流を、多く出さんは勿論、婦人一汎の有樣必ず一變して、今の如き交際にては、事足らざるに至るべし、故に、今日に於て、尙ほ學文せざる貴孃方は、一日も早く學校に入りて、一と通りの修學を爲し、決して時勢に後れざる樣に勉めらるべし、之れ甚だ大切の事なり、然るに、既に一家の妻となりて、家事向万端を取扱はるゝ方々は、固より學校へ通はるべき餘暇もなく、又ゆる／＼と讀書さるべき便利も小かるべければ、此樣の人々が、別に學文さるゝ方法なかるべからず、抑も、一家を脩るには、家內衞生家內經濟の事を初として、母親たるの覺悟、育兒の心得などは、是非とも學び置かでは相成らず、特に又追々開化して、交際の有樣も變化する今日に當りては、文學理學の一斑より、歷史地理の大略、及び、西洋女禮式の一と通りを承知せざれば、大なる辱を受るともあらん、故に、此度かゝる妻君母親たちの都合を計りて、通信女學と申す仕組を設け、家內に居ながら、少々宛の餘暇を親みて、學文さるゝやうの方法を備へ、二三年にて恥かしからぬ程の學力を得さするやう、敎授すべし。

略則

通信女學は、月々中本六十頁以上の講義錄一冊を出版す。右講義錄には、女子生理、育兒心得、家內經濟、女藝案內、萬國史略、文學一斑、理學一斑、家內理學、西洋女禮等の諸科を講述し、且つ、其問答叢話の一欄を置て、右講述の上に付き、質疑を寄せたる人々に應答し、又婦女學文の心得、其外、諸般の有益ある事件をも、書載すべし、尤も右諸科講述の終るを待ち、漸次に、尙更に高尙なる學課を敎授す。右講義錄の讀者は、文意事理等に關して、質問を寄するを得、郵劵封入の上、右質問を送る時は、可成速に應答し、尙ほ人に示して益ある分は、問答欄內に收む。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

第二階連用言の事

連用言のテニヲハの事

○文學一斑（第七回）

語格（其三）（四段の活用前號に續く）

其第二階を連用言といふ　連用言とハ用言より用言へ連なりつゞくが故の稱なり飽きたる、押しひらく、打ちたふす、思ひこがるゝ等のごとし即ち下につゞけるたる（足らん、足り、足る、足れと良行四段に活らく用言なり）ひらく（開かん、開き、開く、開けと加行四段にはたらく用言なり）たふす（倒さん、倒し、倒す、倒せと佐行四段に活らく用言なり）こがるゝ（戀れん、戀れ、戀る、戀るゝ、戀るれと良行下二段に活らく用言なり）ハみな用言なり此のごとく用言より用言へつゞく詞の格ハこゝなる第二階に限りて他かにわることなし。この階のテニヲハはて、たり、つ、けん、けり、なん、ぬ、き、し、等にして「梅さきて風かをる（このてハ俗に用ゐる所と大概ハ差別あることなし）花咲きたり（花が咲イタといふ意なり）魚

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

一階のなんと二階のなんとの別

をぞ釣りし。（魚を釣タヿガアツタワイといふ意にて前かたにありしことあり）家に住みなん（家に住マワウといふ意なり但し一階のなんとハ異にして一階なるハ願の意あり住まなんといふハ住ウナラ好イといふ意になる）などの如くテニヲハを附てもいふなり

第三階終止言の事

第三階を終止言といふ　終止言とハ言きれて下へハ續かず終り止まるが故の稱なり。春ハ花さく。車をおす。鼓をうつ。人を思ふ。等のごとく全く言の意をはりて止まれり。

終止言のテニヲハの事

この階のテニヲハは、らん、らし、べし、めり、なり、まじ、な、ば、かり、かし、と。とも等なり。この中のと。ともハ言止たる詞をうけて更に下の詞へつゞくるテニヲハなり例バ「花さく。と人ハ告けり」この門ハおす。ともあくまじ」などのごとし。その餘のゝハ他の階なるテニヲハと同じく上の言をう

二

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

第四階連體言の事

けていろ〳〵なる意を示すなり。咲く。らんといへば咲タデアラウといふ意になり咲く。まじといへば咲マイといふ意になるなり。打つ。なりといふは打ズヤの意。うつ。めりといふは打ト見エマスの意なり。又こゝのな。は制止のな。といひて勿れの義なり往な。は往こと勿れの義にして思ふなは思ふこと勿れの義なり

第四階を連體言といふ　連體言とは體言につゞく言なり（第三階の終止言第四階の連體言は四段と一段とは同音なれど殊に分てる故は前號四段の飽き飽くのことをいへる條の細注に述べたり）咲く花、なす車、すむ家、ふる雨などのごとし（花、車、家、雨みな體言なるなり）この階のテニヲハは、に。を、より、まで、かな、なり、ばかり、等なり。こゝなる言に助辭をそふる例をいはゞ思ふ。につけても悲

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

三階のなりと四階のなりとの別

第五階既然言の事

既然言のテニヲハの事

将然言のむ。と既然言のど。との別

し」花を折る。をかし止む」飽く。まで食ふ」住む。なり（こゝの四階のなりは三階のありとは意すこし異なれり三階なるは俗にヂャといふ語にあたり此階なるありは俗のデアリといふに當るなり。されば住むなりは住ンデアリと心得べし）等の如し　四

第五階を既然言といふ　既然言とは既に然るの義にて将然言の反對なり。この階のテニヲハをば。ど。ども、なるが飽け。ばといへば飽タソコデの意にて下の言へつゞくなり思へ。ば苦しと云ば思ッタソコデ苦シイと云事になれり（語學にくらき人は四段のば。と混じ誤ること多し四段にて飽かばといへば飽カウナラといふ意にして未だ飽かざる程のうへにていふ語なり飽けばといへば飽タソコデといふ意にして既に飽きたる上にていふ語なり注意して将然にいふべきと既然にいふべきとを誤ること勿れ）呼。べど答ず」と云ば呼ダナレド答ヘヌといふ意にして「花は咲け。ども春なほ寒し」と云バ花ハ咲タナレドモ春ハマダ寒イといふ意な

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

使令言と希求言の事

○一段の活用

一段の將然言のこと並にテニヲハの事

り何れも事物の然なれる上よりいふ言なり。この階ハ上にこその係辭あれバその結びとなりて既然の意をあらはし上にこその辭なけれバ使令言もしくハ希求言となるのほか語を成すことなし（使令も希求もろの詞ハおなじ只つかひざまによりて或ハ使令あるひハ希求となりて意かはるなり。汝この花の枝を折れ。」といはゞ正しく使令なれど「櫻ばな一年なべて散であれ」といはゞ一年中チルナと使令の言にも聞ゆべく又一年中チラナイデアレバヨイといふ希求にも聞ゆべし上よりの係りにていづれにも聞えしむるを得るなり）

第二　一段の活用　一段といふハ五十音の第二の音なる一段のみにて將然言より既然言まで音を轉ずして活らくが故なり即ち其第一階將然言ハ「きにひみいゐ」これを承るテニヲハは四段の將然言のゝとかはるとなし。絹を着ば。肌さはり好し」といへバ絹ヲ着ヤ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

同通用言のこと
並にテニヲハの
事

ウナラ肌サハリガヨイといふこと。花を見まし」といへば
花を見マシヤウといふこと。賢こき人に似なん」といへば
賢こき人に似ヤウナラヨイといふこと。惡き者の中に居
じ」といへば惡き人の中に居マスマイといふことになる
なり　其第二階連用言も一階とおなじく「きにひみい
ゐ」なり承るテニヲハは四段の連用言のゝとかはること
なし。裝束をきかざる（かざるは良行四段の活らきにて飾らん、飾り、飾る、飾れと活らく用言なり）
矢をいとほす（とほすは佐行四段の活らきにて透さん、透し、透す、透せとはたらく用言なり）學
問の奥義をみきはむ（きはむは麻行下二段の活らきにて極めん、極む、極むる、極むれと活らく用言なり）餘
も皆この例におなじ。承るテニヲハの例をあげバ「美はし
き衣を着て。燕會にゆく」子ハ親に似たり」賴政ハ鵺を射き。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

同終止言の事

終止言のテニヲハの事

終止言のかしと使令言希求言のかしとの別ある事

○（き過去のテニヲハにして射きは俗にいふ射タァタの意なり）あの人を見けん（けんは過しことを推しはかりていふ詞なり見けんは見タデアラウの意なり）等なり　其第三階終止言はるをそへて「きる、にる、ひる、みる、いる、ゐる」といふ。旱魃にて川々が干る。書を見る。君の側に居る。鳥を射る等のごとく言きれて止まるなり。三階のテニヲハは四段なると同じ。親の氣質に似るめり（めりはもと見えて有の意にて見ゆる樣子をいふ詞なり然るゆゑに似るめりは似ルトミエマスの意なり）穢しき物は見るまじ（見るまじは俗にいふ見ルマイの意）射るばかりに備へせり。我はこゝに居る○かし（かしは俗にサといふ意にして居るかしは居ルワイサと云におなじ但し使令言希求言の下にそふるかしはこゝなるとは異にして使令言の下につくはタガヨイサといふ意を含めり「ゆけ○かしといへば往タガヨイサといふ意になり「うて○かしといへば打タガヨイサといふ意になるなり。又希求言の下につくはテタモレサといふ意を含めり「君よおもへ。○かしといへば思ッテタモレサの意になり花よさけ○かしといへば咲イテタモレサといふ意になるなり一段、中二段、下二段、加行變格、等のよをそへて使令

文章一斑　語格

七

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

同連躰言の事

希求とある所におくかしも之におなじ見よかし起よかし得よかし來よかしなどのごとし等のごとし

其第四階連體言は三階の音とひとつにして「きる、にる、ひる、みる、いる、ゐる」等なり體言につゞくさまは四段の四階にことならず着る衣。似る人。見る書。いる矢などのごとし（衣、人、書、矢ともに躰言あり）

連躰言のテニヲハの事

うくる助辭も亦四段の四階のゝとかはることなし「この衣は着るに心地よし」かの書を見るより此書を見ば益とおからん「潮の干るをまちて貝をひろふべし」かたぶくまでの月を見るかな等の類なり

同既然言の事

其第五階既然言はれをそへて「きれ、にれ、ひれ、みれ、いれ、ゐれ」といふ。これも四段の既然言とおなじくこその結びとなりて既然の意をわらはすなり。今日こそはれの衣を着れ」といへば今日こそ

八

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

既然言のテニヲハの事

四段の既然言と一段の既然言との別

四段五階の他へ一階の將然言に○よをそへて使令又ハ希求となる事

晴の衣を着タガマアといふ意となり「精神こめて寫せばこそこの畵は君に似れ」と云バ精神こめて寫せバこそこの畵ハ君に似タガマアとなり「君を思へバこそ十年一日の如く御許に居れ」といへバ君を思へバこそ十年一日の如く御許に居タガマアといふ意になるなり。承るテニヲハも四段の既然言なるとかはらざれど只ことなる所ハ四段の既然言ハこその係辭なければ直に使令となり希求となるなれど此なるハこその結びとなるのみにて使令とも希求ともなることなし。この故に上にこそなくば語を成さず（ば、ど、ども、にて承て下の言へつゞくるハ四段とかはることなし）但し此の一段および中二段、下二段、加行變格、佐行變格ハともに第一階の將然

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

言によ。をそへて使令言あるひハ希求言となるなり。一段にて例せバ「汝との書を見よ。「立さらで此所に居よ。「わが子この衣を着よ。などのごとし

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

本回講述の事

世界を平なるものとしたる事

〇地文學講義

第二回　地球の形

偖て、地球の表面に起る色々の出來事を取調ぶる前には、先づ、地球全躰の形は、何如やうのものなる乎を承知すると、大切なり、故に、今は、第一に、此の全躰の形の事、並びに、地球と太陽との關係の事に付て、講述すべし。

吾等ひろ〳〵としたる平原か、又は茫々としたる大海の近邊に立つて、遙かに望み見れバ、其平原も、海も、見渡す限りを以て畢り、其處にて、此の世界は最早や界を爲すかと思ハるゝなり、夫故、古へに在りては、此の世界を、平らなる場所と考へ、一望し盡す所に至れば、縁に土堤の如き山あ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

第一例

りて、此世は全く仕舞に相成るものと思ひ居たり、左れば、日も月も、日々、上り下りして、此世の周圍を廻ハり天の星ハ、丸ろき屋根の如き所に掛り居て、吾々を望み見るものなりとは爲したり。

但し、今ま、少し考を密めて、此世界の表面を見るときは、前に申したる如き考ハ、全く誤まりなりしと知らるべし、必竟吾が眼の見あやまりにて、其實、決して左樣あるものにはあらずと悟り得らるべし、例へば、廣ろき平らなる土地に立つて、彼方を望み見るに、何如ほど眼を見張りたりとも、一里か二里の外は、高き樹木をも認め得ざるべし、然るに、此時、もし傍らに何か塔の如き場所あるとして、之に

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

登り見るとあらんには、先きに直立し、丈伸びしても見へざりしものが、今は明らかに見へ得るとあらん、然し、之にても、未だ四五里の先は分らず、由つて、尚更らに近邊の小山に登りて、遙かに望見するとしたらんには、第一直立しても見へざりしものは、足下に見へ、塔の上よりも見へざりしものが、手に取る如く現はるゝとあらん、斯樣に、何人にても、彌よ高き所ろに登れば登るほど、最初には見へざりし所の景色が、判然と眼に認め得らるゝに至るものあらん、君等此一例によつて、暫らく地球の形の平なるや否やを考へ玉ふべし。

更に、今ま一つの例を設けんに、吾々海邊に出で、磯邊に立

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

第二例

つて、遙かに彼方を打見やれば、水天髣髴として一髪の如く區域を殘す極々のあなたに於て、船の帆一つ二つを認め得ることあらん、此時何如ほどに目を細くし、目鏡を拭ふて眺むるとも、確かに此の帆の外は見へざるとあり、然るに、若し、磯邊の巖の上に登つて、再たび打見やれば、今まで帆の外は見へざりしものが、其の帆を張るところの檣及び船躰の腹をふくらしたる樣など、明白に見へ得るとならん、而して、暫時茲に立つて、靜かに彼方を望んで在れば、又々彼の水天相接する糸の如き間だより、ポツリとして一點の黑きものが現はれたり、見る〳〵此の一點が帆の頂となり、檣になり、船躰となり、遂には、磯邊に船をつな

いで立騷ぐ船頭までをも明白に見得るに至るとあり、之れは遙か彼方なる此世の終りと考へたる所よりこぎ出でたる船が、勢込で此方に向け走り來りたるゆへなり、但し、之は、アナタより來る船の事なり、之に反し、今ま磯邊の下に船やどりしたるものが順風につれて帆を張り上げ彼方に向ふて走り行くとあらんに、吾を遠ざかるに隨つて、先づ船の躰ボンヤリと爲り、追々に見へざるように沒し、更らに進むに隨つて檣かくれ、更らに進むに隨つて帆を見失ひ、遂に亦た彼の水天相接する邊に行いて、一點の黑きものを殘したるが、之れすら又た全く見失なはるゝに至るものなり、之れ即はち、吾が目前よりこぎ去りて遙か

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

之に依て地球の平ならぬを許する事

彼方なる此世の終りと考へたる所に入り、遂に其の形を失ひたるものなり、箇様に最初見へざるものが明らかに見へ、最初明白に目前に在りたるものが、遂に全く見失なわるゝに至るは、抑も何故なりや、君等亦た此の一例に由つて、地球の平らなりや否やを考へ玉ふべし。

此等の二様の實例を以て、靜かに考へ合はするに、地球の表面ハ、決して平らなるものにはあらじ、若しも平らにてあらば、最初見へざりしものが、高き處ろに登りたる爲めに見ゆるものにはあらじ、亦た若し表面平らにして、一望し盡したる所にて、此世が終るものとせバ彼の最初に見へずして、後に現はれたる船は、何處より來りたるか同じ

一六

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

歸納方の事

く亦た最初目前に在つて、後ち遠方に至り、遂に全く見失なわれたる船は、果して何處へか入り了りたる、地球の表面平らなりとせば、斯樣なる種々の出來事こと〴〵く不都合と相成るとゆへ、何分平らにてはわらじとの考が起り來るべく、尙は平らにてはあらざるのみか、地球の表面は必らず曲りて在るべきものと悟り得らるべきなり。

凡そ、何事を研窮するにも、如此く、先づ、數多の實例を認め置き、此の實例を色々に調合し、考へ合ハせて、眞正の理由を見出すを、理學研窮の方法とハ爲すなり、而して、學文上にて、此の研窮の方法を、歸納方と云ふ、歸納とは、色々の實例を推し考へて、遂に其理由のある所に歸納するとの義

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

にて、彼の、一つの理屈より他の理屈を引出して考うる、演繹方と云へる研窮の仕方に對して申すと也。

扨て此の歸納方に由り、前の色々の實例を考ふるときは、地球の表面が平らなりと云ふとは、何分にも正しからざるやうに思はる、地球は、既に地の球と云ふ名をも附したる如く、必らず圓ろきものにてあるべく、其表面は、隨つて曲れる所のものなるべしと思はる、由つては、古し地球を平らなるものとしたる理解は、不當の考へ方なりしとと斷定すべし。

此故に、吾等もし日本より船出して、眞一文字に同じ方角に向つて航行すれば、遂には、復た日本へ歸り來るべし、同

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

地球表面の山谷の事

じ方角に向つて航行したるものが、復た元の所に歸り來ると云ふと、即ハち、地球の圓ろき證據となるべき也。

地球の形ち圓ろきものとすれバ、其表面は何處も必らず相應に曲り居るものなるべし、然るに、平原又は海を望み見れば、成る程段々と曲り居るものならん、此等の曲りたる表面が、一つにつゞきて、即ハち、圓ろき表面となるものならんと考へらるゝと勿論なれども、實際高き山もあれば亦た深き谷もあり、斯る高低あらバ、地球の表面が、一樣に曲りて、且つ一躰に圓ろきものとなるとは思ハれざる所以あるが如し、此事果して何如んと云ふに、成程、山と谷との高低ハなハだ大ひなれども、之を彼の廣大無邊なる

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

表面の高低左程の關係なき事

地球全躰に比較して考ふるときは、譬へば人の顏バせに、ニキブありアバタあると同樣、差したる變化を全躰の上に及ぼすものにはあらざるごとし、故に、斯る小變化幾干あらんとも、地球の全躰は矢張り圓ろくして、至る所ろ多少づゝ曲り居るものと知るべし。

地球周圍の廣大なる事

然るに、此の表面の段々と曲がり行く度數は、甚だ緩やかなるものゆへ、左ては、二里三里の間だ、殆んど平らなるやの如くにも思はるゝものなり、而して、此の曲りの度の甚ハだ緩やかなるは、即ハち、地球全躰の甚ハだ大ひなる證據となるなり、(其理由は茲に、曲り方の甚ハだしき線を續ないで、一つの環を畫かんには、其環必らず小さかるべ

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

し、然し、若し此の曲り方の甚だ少く、甚だ緩やかなる線を續ないで、一つの環を畫かんには、其環是非とも大なるものとなるべし、由つて、地球の表面のマガリ方の甚だ少きは、即ち、表面全躰の實に廣大なることを證するものとなるなり）蓋し、地球全躰の廣大なるとは、蒸滊船に乘つて全世界を廻り行くにも、數ヶ月の日子を要し、一時間に三十英里を走しる蒸滊船に乘じて馳け行くにも、尚は一ヶ月以上の時日を要すると云ふ一事によつて、推察し得べき也。

地球は、圓ろきものと云へり、然し、天文學者等が研窮する所ろによれば、地球の形ちたる、全くマン圓ろきものには

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

地球の形の楕圓なる事

あらず、一つの方、少し厚くして、一方少し薄く、形狀恰かも橙の如きものと知られたり、故に地球は、北を上とし、南を下にし、東を右にし、西を左にして、此の宇宙洪荒の間だに掛りて居るものと考ふるときは、南端より北端へ、眞直に線を貫ぬき、此を兩極線と想像して、さて其長さを側るに、七千八百九十九英里以上あり、然るに、東西へ眞直に貫ぬきたる横の線は、七千九百二十五英里以上ありと云ひて、其差二十六英里半ほどあり、東西は南北よりも此れ程厚きとゆへ、地球全躰の形ちは、上下に於て少々づゝ窪ばみ居るものと知るべし。扨て、又た地球の直徑何千英里ありと云ひても、其大さどれ程ありや、頓に考のつきがたきも

のなり、故に、先づ、吾々の弄そぶ球の直徑を、一英寸半は
どもあるものと定め置きて、地球は此の球より大なると
何倍ならんと考ふべし、ザット積りても、凡そ十二三万倍
ほどはあるべし、眞に大なるものにはあらずや、尚は、亦た、
我家より、何某の處まで、一里あるとせば、此の一里の道を、
七千度餘り、あちらこちらへと往來せざれば、此の地球の
さしわたし丈をも、歩み得ざるとなり、而して、之は直徑の
話しなれば、之を直徑にしたる丈けの大いなる球なりと
云ふ、如何に大なるものなるか、驚くべきとと云ふべし。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

寄寓の折爲すまじき事々

○西洋女禮（第七回）

第十一章　寄寓の心得の事

凡そ、他家に寄寓するものは、能く其家の家風を承知し、成るべく、之と違はざるを專一とすべし、故に、其趣を當家の姉などに聞たゞし、兼ねて之を心得置くべし、其外、己れが友人を伴なひ來り、家内の者と共に食事するとき、餘り長引きて、食卓上に在る事、日々食事の時間に正しく出席せずして、家内の人を待たする事、餘まり多く他の招待を受けて、始終他出し、其寄寓する家に止まると少くして、恰かも之を宿屋の如く扱ふ事、凡そ此等の事は、何れも寄寓する人のつゝしみて爲すまじき者也。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

食事の折手紙を讀む事

家内の人々と共に食事する其時に、手紙を受取るとあらんには、先づ、人々の許を乞ひ置きて、後ちに之を讀むべし、(尋常の食事の折りに、手紙を讀むと云ふとを許さず茲は、恰かも一家内の人の如く思ふべき折の場合なれば、則ハち、之を許すうちにも、先づ此の心得あるべしと注意する義也)、

下婢へ對する事

寄寓する間だ、其家の婢に、可成心配を掛けざるように心がくべし。

入床の時の事

夜最早や寢ねんとする前には、下婢が茶又は菓子などを持來るべし、之を共々に食うべたるのちは、宜しき程に立ち上り、「お休」を申して其床に入るべし。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

男子へ手紙を送る事

人の狀を開く事

第十二章　音信及び贈物心得の事

凡そ、年若の婦人ハ、其の親戚又は契約したる男子の外は、濫りに書狀を送るを不可とす、而して、之は、啻に不可なるのみならず、餘程用心せざれば、其身の不利となることあらん、心なき男子ハ、此の受取りたる手書を、仲間に見せて、徒らなる談の種とすることもあらんを恐るゝなり、尚は、又た、婦人は、既に婚姻したる有婦の男子へ、濫りに書狀を送る可らず、之れ、先方の兩人の親睦を破るなどの恐れあるものなり。

夫へ來りたる書狀を、妻が開き、妻へ來りたる書狀を夫が開き見ることは、自由なり否な其權ある可らずなど、様々

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女王へ奉る書禮の事

の議論あるとあれども、斯の如きは、議論するまでもあく、爲さゞるを宜しとす。

紹介狀及び案內狀の事に付ては、前回それ〳〵の部に於て既に大畧講述し置たるに付き、玆には、其處に漏たる一事を記るさんと思ふが、即ち、

王侯官族へさゝぐる手書の禮を述べんに、凡そ、帝王へ奉つるものは、總理大臣若くは秘書官の如き方へ向けて送り、之より轉送を乞ふべし、今ま英國の女禮に從がひ、女王へ奉ずる書狀の上ハ書の儀式を申せバ、尋常の折は左の如く認むべし。

"To Her Majesty the Queen."

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

皇太子皇太妃へ送る書狀の事

公け事に關する時は、左の如くすべし、

"To the Queen's Most Excellent Majesty."

而して、書狀の最初は、左の如き語バを以て初むべし。

"Madam"

"Most gracious Savereign."

"May it please Your Majesty."

且つ、書狀の終末には、下の如く認むべし、

"I have the honour to remain, with the profoundest respect, Madam,
Your Majesty's most faithful and dutiful subject."

又た、英國ならバ、皇太子及び皇太妃へ送る手紙は、リウテナントコロヲル某へ送りて、之れより轉送を乞う

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

皇姪皇婿へ送る書状の事

婚姻の送り物の事

クリスマス及び新玉の遣物の事

べし、而して、初めには、左の如く認むべし、

"His Royal Highness the Prince of Wales."

"Her Royal Highness the Princess of Wales."

此外、皇族へ對しては、惣じて、左の如く認むべし、

"Royal Highness."

尤も、英國ならば、皇姪皇婿に限り、左の如く認むべし、

"Your Highness."

婚姻の折に、贈るべき遣ひ物は、婚姻に先だつ數日前に、花嫁の方へ届け置くべし。

クリスマス、及び新年の節の遣ひ物は、西洋にては、只だ家內の人のみが爲すとゆへ、別段改まりたる禮式もあら

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

禮の辭の事

朝の來客を送迎する事

ざる也。

序でとして申し置くべきは、禮の辭の事なり、凡そ感謝の義を表するには、心より之を謝すべし徒らに言語を重ぬるのみが効あるにはあらざる也、故に、"So much obliged," 又は "how very kind of you" 若くは、"you really are too good." 等の語を述ぶるにも、力を凝めて、一度丈け申せよ。

第十三章　主婦客を遇する事

主婦と爲つて、來客を遇するには、色々の心得なくては適はず、先づ、

朝の來客を迎ふるに、客もし婦人ならバ、主婦は立出て迎ふべし、男子ならば、席に在つて迎ふるとも差支へなし、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

尤も双方ともに快ろよく手を握るを要す、又第一の客未だ去らざる中に、次の客來らバ、此の兩客を互ひに紹介するを要せず、而して客の去るとき、若し他に女の客あらば、立つて手を握り別辭を述べたるのち、鈴を鳴らし、婢を召びて、送り出でしむべし、尤も、其時、他に女の客あくんば、自から之を客間の入口まで送り出で、其戸を自身にて閉ぢ別るべし。

食事の會の折迎へ方の事

食事の爲めに、客を招きたるときは、主婦は定刻より少し先んじて、客間に立ち出で、來客は、男女の何れにかゝはらば、一々立つて之を迎へ、且つ、其時數分間づゝ之と語るべし、夫故、主婦は成るべく入口に近き所に着席して

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

夜會の折の迎へ方の事

あるを要するとなり。

夜會に於ては、主婦着席の儘にて在り、第一の來客來りたるとき、立つて之を迎へ夫より續々として來客ある比は、入口に立つて、之を迎ふべく、尚は、必要あるときは、二楷下の處に立つて迎ふるもよろしきと也。

此外食事の折の主婦の心得は、其章に於て既に講述したり、又た下婢取扱の心得などもあれど、此は別に家政の篇に於て述ぶべし。

第十四章　婚姻に關する心得の事

婚姻の手始の事

婚姻正當の順序を言はゞ、最初男女相知れるととなれりし後ち、意氣相ひ結納して先づ手續を履み約束を爲し、偕

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

西洋の男女交際嚴密の事

て、時を定めて結婚するとあり、故に、此事惣躰に關する禮式を述ぶるには、第一に、男女交際に付ての一二の心得より、第二に、カートシップと云ふ見合交際の事、第三、エンゲージメントと云へる約束の事、第四婚姻に付ての禮式、第五、婚姻後の心得方と區別して、講ずるを正當とする也。

西洋にては、男女の交際自由にして、双方の行通ひも勝手氣儘なるかの如く思ふ人もあるべし、然れど、凡そ禮式を嚴密にするものハ、決して左樣の事なし、男子が婦人を訪ふとは有之、然れど、婦人が男子を訪ふとはなし、又た、男子の若者が、若き女の朋友を訪ふときは、必らず其家の母親の面りにて、談話するを要する等の規則ある

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

とあり。

差向ひの事

凡そ、見合交際の間だは、第三の人の居らざる時、當の男女二人のみにて談話するは、宜しからず。

贈り物を受くる事

未だ結約せざる内に、男子より女子へ大したる贈り物を送るは、宜しからず、故に、男子の方にて之を心得べきことは云へ、もし之を送り來せし時ハ、女子は父母の面前に於て明に之を謝すべし、然せば、之を受けたるの義務を負ひ乍らも、別に私の上の責任なきを得べし。

申出の事

扨て、見合交際の間だに、双方ともに、よく〳〵互ひの氣性性質を知り合ひ、又た、女子の兩親も、男子の氣風を知り得べし、斯て、程好き比ろに、男子より約束の義を申出る

兼て母に相談すべき事

なり、之を英語にてプロポーサルと云ふ申出の義なり、而して、申出は、書狀にて言ハんよりも、口づから申すを正式となす。

見合交際の間だに、女子は、其母親に就て、彼の男子の人物何如を問ひ、母親の考へを承知し、預じめ覺悟を定め置くべし、故に、右に申す如く、口づから言ひ出られたるとき、速かに否やの返事を述べ得べく、而かも、此の返事は、

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

歯の生る比菓物の事

○育兒心得（第七回）

問。引續て伺ひたきは、子供の歯の生ゆる比ろは、菓物を食べたがるとも有之候、右は、與へても宜しく候や。

答。ストローベリー、ラスプベリーの如き苺類か、又は、林檎を燒きたるもの、若くハ、葡萄五つ六つの汁などハ、與へても宜しく、特に、泌結いたせる比などは、尤も効能あるものに候、但し、よく〱用心して、皮又は種を食べさせぬように為さるべし、尚は生の林檎及び梨子の如きは、此時、用ゆるに宜しからず候。

此頃子供に病多き事

問。元來歯の生ゆる比は、何如なるゆへに候や、小供に病氣多きよう思ハれ候。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

答。此事にて候、眞に齒の生ゆる時節は、子供の一生に取て、隨分大切なる機會に候、附ては、之より關係を及ぼし、種々の病氣を引起すとも有之、先づ腦の痛むと、肺の焮衝、及びセキ、胃の酸敗、腸の泌結もしくは下だりなんど、さま〴〵の病氣を起すと、尤も此頃に多きものに候、依て、其治療法よりは、先づ、豫防の事が緊要に候が、其方は、成るべく健康なる食物を與へ、又は、空氣の流通よろしき所にて運動せしめ、

(注) 玆にて申すとあり、若き動物の類が、齒を生ずるとき、別段病にもかゝると無きハ何故かと問ひたる人あり、或もの之に答て云く、之は空氣の流通宜しき所にて

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

此折の治療法の事

勝手に運動するゆへなり、然るに、人間の小供は、狹き部屋に閉ぢ込められて、身動きするとも少きが故に、扨て
は、斯く色々の病あるなり、米國統計局の報告に據れば、
病死人百万人の中に、齒の生ゆる比ろ死したるもの、都
にては、六百十六人あるに、田舍にては、只だ百二十八人の
みなりし、之は、即ハち、空氣の流通宜しきと、自然運動の
十分なるゆへ也。
若し、泌結なとせバ、ヒマシ油、大黃、マグ子シアの類を與へ
て、下劑をかくるに在ると存じ候。
問。豫防法は承ハり候、よりて、治療の方法をも、大略伺ひ
置たく候。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

答。附て先づ申置たきは、此頃歯の痛むに二様有之候、一つは、痛みも左程甚しからず、子供ハ指を口の内に入れ、又た、其處らに在るものをも口に持ち行く位、尚は、ツバ多く出で候までにて、別段かハりたる風も見へざるとに候、然し今一つの方は、痛み餘程はげしく、歯ぐき膨れ熱して、赤くなり居るに付、之に少しだも觸るゝを嫌らひ、乳も飲まず、口中かハき上り、頭重く、且つ熱し、氣分ことに悪しき様に見受けらるべし。斯様に二つの相違有之に付き、随つてハ其の治療法も、亦た各〻相異なるものに候。よりて、第一に申す如き節には、指を以て歯グキを磨る事、毎夜眠に就く前に、華氏九十二度位の微温湯を以て口を嗽がする事食

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

物に氣を付くる事、新鮮の空氣を吸はせ運動を多くせしむる事先づ右樣の方法を行はゝ、大抵は治まり申すべし、別段齒グキの血を取るまでの事も之れなく候、然し、第二に申す痛みのはげしき節は、最早や白徒の手療治にては參らず、早速之を醫師の許に連れ行きて、治療を乞ふべし、尙は一つの奇法は、都に於て齒の痛みはげしき節は、田舍へ轉地すべし、然るとき忘るゝ如く直はるともあるものに候。

下痢の折の事

問。承はり候が、段々と此際の泌結の惡しきとを承知いたし候、然し、若し下痢など致し候節は、何如なすべきものに候や、何か止め藥をも與へ申すべきか。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

運動の事

答。決して〳〵、御與へには及び申さず、凡そ泌結により
て腹中に滯りを爲さするは、即ハち、腹内に惡病を宿らす
ると同じことに候へバ、彼の下痢と云へることにより、時々此
の滯りを下ろすこと、自然の妙配工に付き、其儘に爲し置か
れたく候。

問。齒に關する事に付ては、色々と承ハり候、之れより運
動の事に付て伺ひたく候が、赤子にも矢張り、運動は大切
のものに候か。

答。尤も大切の事に候、もとより赤子のことゆへ、自身にて
身を動かすことは出來申さず、母親、又は、姥が、之を手に懷
きて、外に出で歩るくことに候、此が効能多きよしは、前の齒

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

何日比より運動いたすべくやの事

の痛みを治むるところに於ても、少々は申したるが、赤子が時々大聲にて泣くとあり然るに之を外に連れ出るときは直ちに止むと毎々見受るところなるが、之れ、即ハち外に出でゝ運動せしめらるゝとの、甚ハだ樂しきことを知るゆへに候。

問。然らば、生れて後ち、大抵何日ごろより此の運動を爲させて、宜しく候か。

答。左樣、外に連れ出でゝ、運動せしむるとなれバ、固より天氣の都合にも由ることに候が、夏の天氣快晴なるころならバ、生れて後ち二週間ほどを經たらば、最早連れ出づるとも宜しく候、然し若しも冬ならば、勿論一ヶ月以内の赤

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

稍や生長して後の運動の事

子を、外へ出すは宜しからざるのみならず、左る時にても、天氣の餘程快晴なる折を擇ぶこと緊要なり、斯て、三ヶ月の後には、更らに度々連れ出し、三ヶ月目よりは、假令ひ地面の濕つて在るときと雖ども、尚は外へ參るに不可なき也、且つ、斯くして外へ出づるときは、衣服をシッカリと着することは、無論のことなれども、顏に何か被ひものを置きて出るものなどあり、斯ては、切角外へ出したる甲斐もなきことゆへ、左樣のことは爲すまじきこと也。

問。餘程生長して、匍匐歩む程の時は、何か運動せしむるに好き工夫はこれなきものに候や、伺ひたく候。

答。別段差したる工夫にては無之候へども、之を、疊の上

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

次の睡眠の事

などへ臥せしめなどして、置かバ、自ら立たんとし、或るは、先きへ進まんとして、手を擧げ、足を動かし、全身をモミにもんで、知らず識らず、少からぬ運動を爲すことのあるものなり、故に其比の子供には、此の工夫が、尤も安全にして且つ便利なる運動法かと思はれ候、然し、あら〳〵しく之を取扱かひ、時としては、子供の床の上へ倒すことなどあり、慘刻此上もなきことと申すべし、よく〳〵之を取扱ひて、鄭寧にあしらふべきなり。

問。段々と伺ひ候、次には、何をか御尋ね申すべきか、御指圖を願ひたく候。

答。然らバ、先づ、子供の睡眠の事を申し、其後ち、病氣、藥用、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

食物などの事を講述いたしたく候。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

○家内理學（第五回）

第四章　温熱反射の事（下）

色と發熱との關係の事

通俗の説に、物の表面の色次第にて、熱を發するに多少ありと云ふものあり、然るに、博士ベーク氏の試驗によつて之を見れば、此説全く誤まりにて、黒き面よりも、亦た、白き面よりも、同一様に熱を發するを知らる、

温熱反射及吸込の事

凡そ、或る物躰の上に、温熱が射來るときは、此の温熱、或は反射せられ、或は吸込まる、若しも反射さるゝときは、則ハち温熱が外へ行くとゆへ、其物躰は、之が爲めに温ためらるゝとなし、然るに若し之が吸込まるゝときは、則ち温熱悉く物躰の内に入るの理ゆへ、之が温たかになるは言ふ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

までもなしと知るべし。然るに、茲に光つたる金物類は、温熱を反射するものなれば、扨ては、自から温ためらるゝとも亦た少きものなり、故に、内より温熱を發しがたきものは、外より温熱を容るゝとも亦た難し、此の光つたる金物の如き、元來外へ向つて熱を發散するとの尠き所以、すでに前にも述べたるが如くなれバ、即ハち、今茲に云へる如く、亦た熱を受くるとも薄きものなり、左れば、ガラスは、一百の温熱が射來るときは、其の九十を吸込みて、殘る十を反射すれども、能く磨きたる銀は、九十を反射して、只だ十丈けを吸込むとなり、之を以て、左の四の規則を定むるとを得べし。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

發熱と色との關係の事

能く熱を吸入るゝものは、反射するとの少きもの也。

能く熱を反射するものは、吸込むことの少きもの也。

能く熱を發するものは、亦た能く熱を吸込むもの也。

熱を發するとの少き者は、亦熱を吸込との少き者也。

前には、物躰の表面は何如なる色にてあるとも、温熱を發するの多少に關ハりあるものならむと譯きたるが、之は、温熱を發する上の事なり、温熱を吸込む上につきては、物躰の表面の色次第にて、大いなる關係のあるものなり、昔し、フランクリンと云へる學者は、種々の色の布を雪の上に覆ひ置きたる處ろ、黑きキレを被ひ置きたる處が尤も低く下がりたりと云へり之は即ハち、其下が尤も早く溶

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

け行きたる證據にして、黑き色が温熱を尤も多く吸込むこの理を明らかに示すものあり、斯て、又黑き布の次には、青きもの其次には、鳶色のものと次第に溶け行きたる量少くあり彼の白布にて覆ひ置たる處は、殆んど毫しも溶けたるもようあらざりしを見たり此故に、若し雪を速かに解かんとせバ、其上に、ス、を散らし置かバ、宜しからん、又た、黑土の田畠は、夏冬ともに他の色の土よりも温かありと云ふも此の理わりあるに由る、左れば或る寒國にて、若し、田畠に黑き土を入るれば、之れ即ハち、稍や南方の國土へ移轉して耕作すると同様の効能あるべし、尚は又た、黑土の壁を後ろにして、作りたる葡萄其外の果物は斯る

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

温熱の反射交換

ものゝなき處ろに作りたるものよりは、早く熱すべし、之と同理にて、冬は黑き着物が宜ろし、之れ多く温熱を吸ふゆへなり、夏は白き着物がよろし、之は、外より來る熱を反射して、内に吸込まぬゆへなり、但し、冬日陰に居るときは、反つて白き衣物が宜しからん、之は、熱を吸込むとの少きものは、熱を發するとも亦少きものゆへ、躰内の温氣を外へ發出すると少く、隨つて躰だを温ため置くと多からんが故なり。

又た、凡ての物躰は、其有する所の温熱を發し、傍らに在るものより發する温熱を吸込み、不斷始終此の温熱を交換するものなり、故に、例へば、一千度即ハち赤熱までに熱し

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

の事

暑夜と寒夜との相違の事

たる彈丸の傍らに、百度の温熱の彈丸を置かバ、一方は烈しく熱を發し、他はゆる〳〵熱を發し、而して、此の發する所の双方の熱、こも〴〵一方に吸込まれ、遂に兩方ともに同樣の温度のものとなるべし、然るに此の百度の彈丸の傍らに、三十二度の氷を置くか、又は、此の三十二度の氷の傍らに、北極地方の極めて冷やかなる氷を置きて見むに、何れも、皆な互ひに温度を交換すると、前に述べたると同樣なるべし。

又た、晝の間だは、太陽の温熱に温ためられて、萬物何れも相應に温たかきものなれども、既に夜と爲れば、最早や日光日熱も無ければ、萬物各々、其の所有するところの温熱

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

を、外へ向つて發散するまでなり、然るに、夜間もし雲多きときは、一旦物躰より發出したる温氣、雲の爲めに遮ぎられて、又々地面に向つて反射せられ、之にて再び地面の邊りを温かにするともあれども、彼の銀河天上にかゝやぎ、見わたす限り雲はれて、月さえ星きらめく樣なる夜に於ては、右に申す如く發散したる温熱を反射すべき雲も固より之れ無きとゆへ、地面の總ての物躰より發したる温熱は、只だ天上の空漠なる間隙に向つて散ぜらるゝものと云ふべし、左れば雲ある夜は、雲なく、月星かゝやぐ夜半より温かなりと云へり。

露なるものは、何如にして出來るものか、近世に至つて初

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

露の出來る譯の事

めて其理由は分りたれど、昔しは、種々面白き想像説をバ附會したるとなり、或人は云ふ、露は地面より出でたるものなりと、或人は云ふ、露は天上より降りたる精細の雨なりと、或人は云く、之は星より發出したる泌液なりと、由て此の點滴の中に、星躰の分子を含めりと做し、之より黄金を製し出さんと迄でに、考へたる人もありと聞ゆ。然るに、今を距る四十餘年の比ろ、博士アルス氏が、初めて之を考へ出し、之は、温熱發散の事に關係あるものと悟りたり、蓋し、空氣の中には見る可らざる水蒸氣莫大に含まれ居るものなるが、此の空氣いよ／＼熱すると共に、水蒸氣を含むの量も、亦たいよ／＼多きところ、此の空氣もし冷却す

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

(一五)

るときは、先きに其中に含まれ居たる水蒸氣、即ハち凝つて露と爲る也、故に、部屋の內に水を入れたるガラスを置けバ、此のガラスの外側に、露の如き點滴を生ずるを見ん、又た、外氣ハなハだ寒きときは、窓のガラスの內側に、矢張り露の如き點滴を生ずるを見ん、此等は、何れも同樣の理合にて、即ハち、此のガラスに接するところの空氣にハかに冷却し、其中に含み居たる水蒸氣をバ、凝つて斯る點滴と爲らしめしものなり。

外の地面にて露が出來ると、一に右に云へる理由より生ずるものゆへ、扨ては、亦た露の置く處ろと、置かざる處との相違を起すとのある也、之を何如にと云ふに、夜間に、惣

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

露の置くと置ざるとの事情の事

躰に冷へ渡りて、地面の如きは、十度乃至二十度ほどの寒氣と相成ることもある程なれども、地面に在る色々の物躰には、早く熱を發し去りて、夙に冷やかと成れるものもあれば、亦た發熱中々緩やかにして、急に冷へざるものもあり、而して、此の夙に冷へてあるものは、固より露を置くとなるが、彼の未だ冷へざるものには、露の出來べき理由あらず。由て、露の置くものと、置かざるものとあるなり、此故に、ガラスの如きは、尤も早く熱を發せるものゆへ、亦尤多く露を置くものなれども、石の如きは、熱を發し去ると尤も少きものゆへ、之が上に露の置くとも、亦至つて稀れなるものなり。尚又た冷やかなる物躰に觸れたる空氣中の 五六

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

水蒸氣凝つて露と爲るものが、一旦此の物躰に觸れて冷やかと爲りたる空氣が、急に外へ逃げ去り、代つて新なる空氣が之に觸れ、彼此と冷やさるゝ中に、又々外へ逃げ去る如きとあらんには、假令ひ其物躰は何如に冷やかならんとも、其上に露の凝り生ずべき暇のあらざるものなり、夫故、風吹きて、空氣の始終他へ流れ行く間には、露の置くと甚ハだ稀れなるもの也、右の如き譯ある故に、左の如き規則を定るを得べし。

空氣の溫度低くなりて、後に露を生ず。

空氣の溫度いよ／＼低くなれば、露の出來るとも亦たいよ／＼多し、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

熱の反射する所には露の出來ざる事

（百性は、露の置く夜は寒しと云へり、但し、露ある夜が寒きに非ず、寒き夜に、露が多きなり）

空氣に温氣いよ〳〵多きときは、露の出來るとも亦たいよ〳〵多し、

（此故に、沙漠の近邊にては、夜間の寒氣甚烈しけれども、露を生ぜず、之は空氣中に温氣のなきゆへ也）

尚又、或る物躰が、互ひに温熱を反射し合ふ處ろに於ては、空氣の冷ゆるとも、隨つて少きゆへか、露の出來ると至つて稀れなり、例へば、平原の草の上には、露の珠散々として見ゆれども、樹木ある下影の草には、露を見ると少し、之は、草より發する熱、樹木より發する熱、相ひ反射し、相ひ交換

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

霜の出來る譯の事

して、扨ては、露を生ずるほどに冷却せざるゆへならん、之と同樣の理にて、雲多き夜は、露少く、雲なくして萬物より發する熱、空漠の天上に向つて只だ發散するのみ再び反射せらるゝとなき夜は、露甚だ多し。

此故に、夜間植木の上に、屋根を作り置くか、野菜の上に、藁を覆ひ置けバ、其草木の冷ゆると少く、冷ゆると少きが故に、露も出來ず、隨ては、(露より霜の出來ると、次に云ふ如き理合のものゆへ)霜にいためらるゝとも、少きもの也。

扨て又た、空氣中の水蒸氣、一たび凝つて露と爲るが、此の露さらに冷ゆるときは、卽ハち霜となる也、故に、霜は露の

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

一層凝結したるものと知るべし。

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

大黄丸の事
燐酸曹達の事
精製石鹸丸の事
蜜の事

○女子生理　(第七回)

第二章　懐姙の事　(其五)

扨又ヒマシ油、もしくはサラッド油の如きを、飲み難き人は、大黄丸一二粒を、床に入る前に飲むか、又は、燐酸曹達四半ヲンスを、汁物の中に入れて、時々食事の折に飲むべし、又た、身動きの困難を覺ゆるほどと爲れる比ならバ、精製石鹸を以て造りたる丸藥、二三四粒を服すべし。

此の石鹸丸藥は、精製石鹸百ゲレーン、カラヱー油六滴を以て、丸藥二十四粒をつくり、之を床に入る時、二三四粒づゝ服するなり、

尚又、食事の折り、茶碗に蜂蜜を溶きて、食しおかバ、通じを付

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

通じ能くする心得の事

くるとの変能、意外に多きものなり。
凡そ、泌結と云へるとは、産婦に取つて、非常の害あるもの
ゆへ、よく／＼用心して、常に通じを附くると大切なり、或
る醫博士は、通じが正しければ、産極めて輕ろし、との理由
を、餘程强く主張されたり、故に、妊婦は、先づ食事の時間を
規則正しく定むる事、次に、食物には、粉の如く凡そ植物質
の多き品物を成るべく撰むべき事、毎朝冷水を飲む事、廣
場に出でゝ度々運動する事、家内の事務は、矢張り擔當し
て、能く之を理むる事、万事に心をいらち激するようのと
なき事、夜遅くまで起てあるまじき事、凡べて流行のたわ
れたる宴會などへ出でざる事、且つ、日々時刻を定めてハ

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

(五六)

通じ薬を飲むは未だ可ならぬ事

ゞかりへ登るの習慣をつくる事、(朝飯后に参るが尤もよろしきとなり)凡そ、右様の諸事に注意したらんには、泌結するとなくして、随て産の軽ろかるべきと必然なり、姙婦に、始終家の内にかくれ居て、一切外出などせざるもあり、又た、萬事大業しく思ひて、家内の務めを悉く放棄するもあり、夫等の為めに、身躰の運動足らずして、彌よ泌結し、通じの宜しからぬとあり、凡そ通じ薬と云へるものは、前にも云へる如くして、成るべく其宜しきものを撰み用ゆると勿論なれども、惣べて薬は、一時其効能あつて、其折はよく通じを附くるのきゝめも見ゆるものなれども、其後は、反つて腸を引〆め、此后ちは復た薬を服せざれば

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

灌腸の事

通じの附かぬようなる習慣をの生ずるとなり、故に、成べく、人手の薬を用ひずして天然の治療法に委頼するように覚語し、即ハち、運動其外万事、右に述べたるようの心得を以て、常々より通じを宜ろしくするように取計ふべきなり、

但し、既に、泌結したる上は、致し方なく、薬をも用ゆるとなるが、凡そ、人為の治療にてハ、彼の灌腸ほどに能く通じを附くるはあらざるべし、灌腸は、精製石鹸を温湯にて溶き、之を、其の道具にて致すとゆへ、自から行ふに甚ハだ容易なり、調合の割合は、石鹸を溶きたる水三合に付き、温湯一合半を混じ、牛乳の搾り立ての時ほどの温度と為し置き、

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

通じの附たる後の事

以て、一週二三回極早朝に施すべし、凡て灌腸の利益は、胃を傷めず、消化を妨げず腸に害を與へず、而かも、毫しの傷みもなく、當人自身にて行ひ得る等の便利に在り。

既でに、通じの附きたる後に、尚は通じ藥を飲むは、尤も愚らしきのみか、尚且つ害あるもの也、故に姙婦は、右ようの方法にて、既に通じを得たるのちは、則ハち前に云へる如き平常の心得方を行ひ、又復たび泌結せざるように常々心掛をくべし。

下痢の事

凡そ、姙婦は、大抵泌結し易きものなれども、又時としては、下痢するとのあるものなり、斯樣なる時ハ、驚きて、直ちに下痢どめの藥を用ゆるものなどあれども、之は宜しから

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ず、必竟この起りは、腹中に餘まり多くの滯りを生じたりしかバ、自然が妙配工の御手を以て、偶ま之を下痢せしめらるゝものゆへ、成るべく、辛捧して、其儘に下し了り、扨て又た、自然が程好く之を止めて、元の如く直はし呉れるの時を待つを好しとす。而して此時、啻に止め藥を用ひざるのみならず、尚は程好き通じ藥を、好き加減に用ひなバ、反つて一層早く滯りを下ろし去りて、躰だに効能あるべきあり、故に、斯樣の時には、矢張り、ヒマシ油か、大黄チンキか、又は大黄及びマグ子シアの如きものを用ゆるを可とす、而して、此折、ヒマシ油を用ゆるとならバ、新鮮の牛乳の上に、匕一杯ほどを落して、飲むべし、大黄チンキあらば、水を

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

下痢の時腹の痛む折の事

匕二杯に付き、一杯入れて飲むべし。
尚は、下痢の折に、腹が痛たむとあらば、フランテルの袋に、食塩を入れて、温ためたるものを、其の痛む所へあつべし、尚は又男袋に温湯を入れて、之を其の部分へ着くるとも宜ろし、（但し、温湯を入るゝときは、湯を袋の半ばほど入るべし、決して十分に入るべからず、躰への着き工合宜しからぬもの也）而して、下痢が止まりたるのちは、能く食物に注意し、又た足を温かにし、且つ決して之を濕はす等のとあるべからず。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

通信女學

第二回前金

通信女學第一巻より第六巻に至る半年分の前金は最早や前月にて拂濟と相成候に付本巻より以後御隨意の前金至急寄送有之度候然らざれば止を得ず以後發送方見合せ可申に付此段御承知有之度候

通信女學一册六十頁以上一巻定價二十錢但無郵税

半年分前金一圓

一年分同　一圓八十錢

東京々橋區日吉町八番地

女學雜誌社

廣告

中島湘烟女史著

●善惡之岐

定價五拾錢
繪入美本

●目次○野蠻とも言へ未開とも言へ實に大平の里なるべし○高島田に也の字の娘五分さかやきに無刀の浪士○紅潮端なく上る佳人の面○一樹の名花春動く初○谿間の清流も繁都の泥水ありしを知らずや○双腕の勇餘す所なく滿腹の智遺す所なし○撫松庵のみ能く撫松庵の胸中を知れり○痴夢情煙春月暗○誰知一滴愛情水散湧奔波激浪來○世上の功名灰塵に異ならず○錢嚢瘦腹裡飢以て天下の經濟を論ず○貧生の慷慨恃に足らず○當路の君子にして袖の下を嫌ふものあらじ○双蝶花に戯れて春情あり○歡樂のある處悲愁の伏する所。姉妹の談濃かにして春窓の燭微かなり○怨もなく怒もなきは交りと愛と共に新なるによる○撫松庵が胸邊寒く吹き送る巖間の風ぞ腥し○世難海より深かく人

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

遞信省認可

情紙よりも薄すし○會離緣あり應報爭ふべからず○優ある哉水聲人事の齟齬を嘲る○情人の艶話唯閑雲の聞くあるのみ○上帝親あく唯善人にくみす○客窓涙あり孝子の情○玆に因ありて玆に果あり○人間の歡樂一場の夢。墜葉翻つて力あく懶禽啼て恨あり○地下の白骨土いまだ冷かあらず病窓の美人恨愈多し○開花原是落花風○人の死する其の言ふ事や善し●賣捌所○銀座博聞社、原金港堂

發兌 東京新橋日吉町八番地 **女學雜誌社**

●速記叢書 **講談演說集** 第七冊

明治二十年十二月一日發行

〔定價金十二錢郵稅四錢(郵便切手代用隨意)〕

講談演說集第七冊には

內務省參事官明治法律學講師スタチスチック社幹事感化慈善會幹事 宇川盛三郎先生の講演に係る

監獄論 を載す

●●●●●●●●●通篇凡二十章、二萬三千餘言●●●●●●●●●

●●●●●監獄全體に關する事項論じて漏すことなし●●●●●

監獄論目次

●緒論●監獄の行政上の位置●監獄の目的及方法●監獄と警察と裁判との關係●監獄と敎育との關係●矯正院即感化院●放免囚●監獄い決して賤しむべきものにあらず●犯罪人と貧民との關係●貧民救助の目的●貧民救助の方法●歐米の監獄の事業●歐米の監獄の方法●歐米諸國に於て實行する監獄事業●歐洲の監獄の種類●佛國の監獄に關する實例●日本の監獄の種類●日本の監獄に關する實例●監獄の改良●約說

發賣書肆

東京日本橋區通三丁目十四番地 丸善商社書店
東京日本橋區本町三丁目二十番地 瑞穗屋卯三郎
東京日本橋區馬喰町二丁目一番地 石川敎育書房
東京神田區淡路町一丁目一番地 巖々堂

發行所 東京京橋區日吉町八番地 女學雜誌社
持主兼編輯 巖本善治
印刷 森田豐

東京秀英舍印行

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY